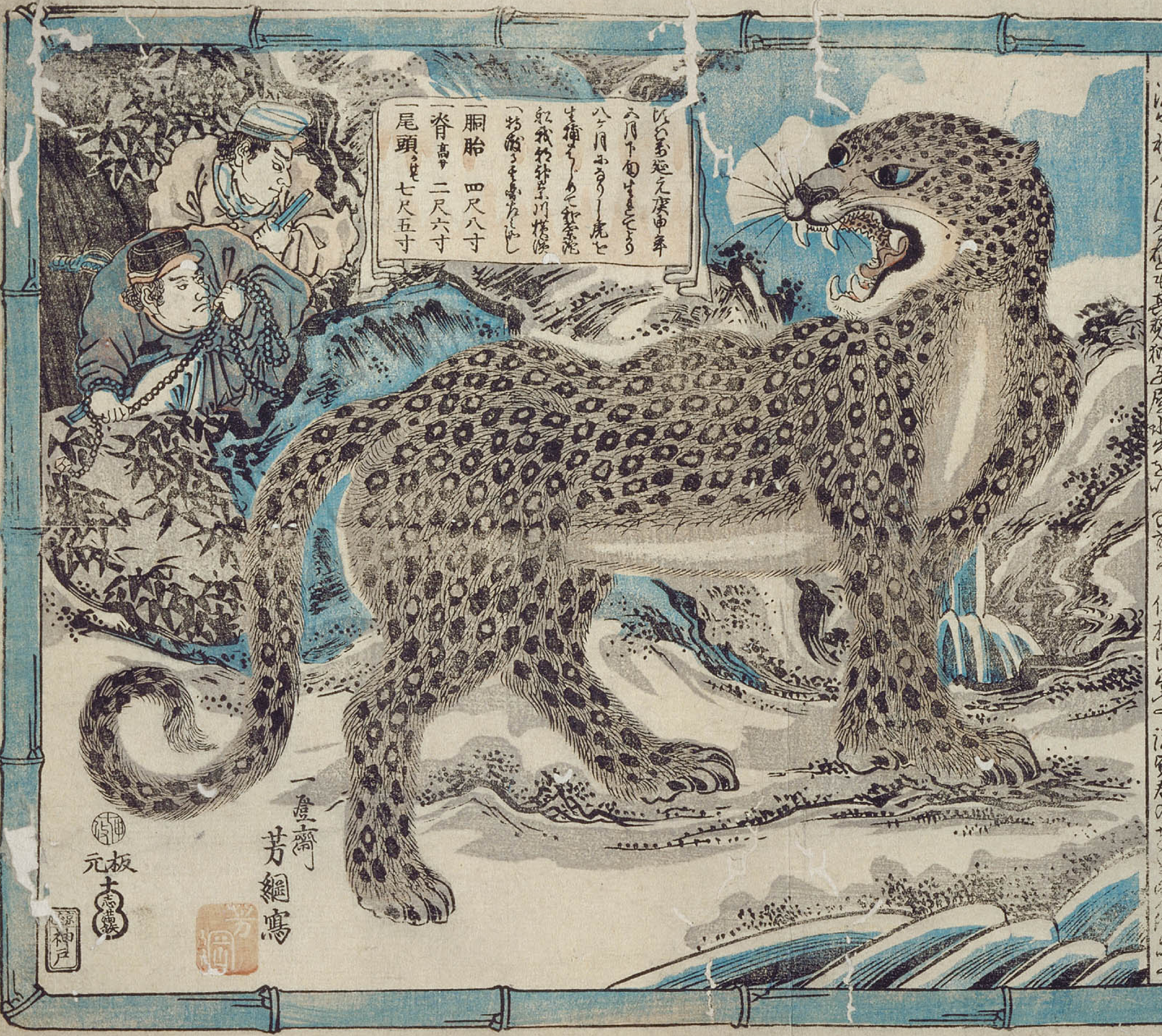
来ル七月上旬より於西両国広小路[illegible]

一今や太平の御代のありがたさハ居ながらにして四夷八蛮の人物をしり香木奇獣を眼前に見る されど萬君説郛に云く西域志に云く正北に生じ大唐天竺にも出世深山幽谷を栖と為し遠に本朝の類を 翼且飛る天を翔る類を白眼に睨み猶城をたちまちくらふ事をはゞからず若人山中にて出逢ば必命を失ふ故に百獣の 司ゆへ虎嘯ば風生じ龍吟ずれば雲を發す此虎を称て大虫と曰又虎と曰和蘭にてタイガラと云宝国 これ虎を登良と訓寅の刻ハ陽気發動れ始め七ツ時なり又月にありてハ正月也故に下僕これを守る君を選 寄年を寿ぎ七難を滅して七福を生じ悪病邪気を退け婦人ハ月の滞なく子安に産疑なし小児ハ 疱瘡軽くし一切邪気をうつさぬ也しかるに御覧に備ふ豹ハ毛虎ハ万国諸州にても稀なる 獣なり宝運福寿を守る事神明の如し今般和蘭セキダイと申高岳にて生捕神奈川横浜へ 渡せれ八ヶ月なれども其勢獅子犀水牛を喰ふの威あり依て御当地諸賢君の[illegible]



此の豹ハ万延元庚申年
六月下旬生れてより
八ヶ月ばかりし虎を
生捕なりて和蘭船
に載て紀州横浜
へ持越候ものなり

一胴胎 四尺八寸
一脊高サ 二尺六寸
一尾頭まで 七尺五寸

一登斎
芳綱写

板元 大黒屋
神戸

[豹見世物引札]　文庫10-8008-4
早稲田大学図書館蔵／Waseda University Library